

## 「単産」と「地域で奮闘する労働者」との関わり強化について

20200727

奈労連 松本俊一

私が奈労連議長になって2年目。前任のベテラン井の尾議長から初めて話があった時にはとんでもない事と検討すらしなかった。この2年弱を振り返って「単産と地域で奮闘する労働者の関わり強化について」考えたい

実際、私自身、2年前当時奈労連では常任幹事の役割を持っていたが、頭の中は単組（ならコープ労組）、関西地連、生協労連がほぼ100%で奈労連からの要請等はプラスαの荷物との感覚しか無かった。そんな構えで議長なんてとんでもないと考えていた。どっちも活動も中途半端になり失礼になると。しかし後継者不足の中、約2年越しの単組を含めての説得に出来る範囲でしか出来ないけどとの約束で引き受けた。

だからこそ今回発言のテーマ「産別と地域で奮闘する労働者の関わり」については痛い程分かる。各単産の代表が奈労連に結集して常任幹事会を開き運動の進め方について論議はしているが、頭の中の数%しか奈労連運動に向かっていない。（私がそうただけなので、もちろんもっと高い割合の方もおられるとは思いますが）悲しいけどそれが実情であると思う。日々の単産や単組の闘いが熾烈であるから仕方が無いのも十分理解できる。自分がそうだったから。

でも遅ればせながら私自身が少しづつではあるが変化してきたと言う事は、各単産も変化する可能性があると考えている。

私が少しづつではあるが変化してきたのは、やはり「人と人」の出会いとつながりだと思う。単組、単産ではあまり出会わない、個人の闘いと出会い。奈労連一般労組の個人の闘いは、解雇、パワハラ、賃金未払いのオンパレード。酷い仕打ちの中、明日もどうなるか分からないギリギリの闘いをしている。まさか大学の教授がリストラ？と思った奈良学園大学の闘いなどは、普段滅多に話をする事も無い大学教授との出会いもある。一緒にビラまきや裁判傍聴する中その人との人間としてのつながりが出来てくる。

そう言った一般労組の組合員との個人的なつながりの影響が大きい。

20春闘ではTくん⇒一般労組員（解雇、不当配転⇒団交で和解）こんな力のある素敵な労組を殆どの人は知らない⇒もったいない⇒もっと開かれた組織に

○春闘決起集会から 名前「春を呼ぶ食と文化。生き地獄からも脱出のトビラ」

場所 公民館、会議室、教育会館×⇒ライブハウス貸し切り

2.23 コロナぎりぎりで行った⇒今までに参加した事の無いような人が参加してくれた

・但し産別の関わりについては問題。計画では賛同してくれていても実際の動員は、、、

○メーデーを大きなフェスに ⇒コロナで中止

・動画作成にシフト

弱点を克服したい⇒産別と奈良の地域で奮闘している労働者との関わりを前面に  
⇒絶対現場をまわるべき

産別とのつながりの問題⇒(国公、自治労連、医労連、一般、生協+ライブハウス)  
⇒労働者をピックアップしてもらってインタビューで回る

\*裏話 もめたメーデー宣言の内容 私は議長として⇒改憲、労働法改悪の問題  
⇒労組はいつも何でも一遍に言おうとする×  
⇒発言も編集カット

・1300回再生⇒おおむね好評

・にぎやかしのドラムも好評 ⇒奈良公園の 鹿全部逃げて行った

開かれた組織に⇒次

○8.29 山添村フェス⇒テント張って交流の場をと計画

⇒コロナ禍第2波?で一旦仕切り直し

⇒落ち着いたら実行委員会形式で作り上げ、是非成功させたい。

コロナ禍での閉店による相談も増えてきている。

交渉にもなるべく参加している。

使用者が労使関係について無知と言うのもあるが、労働者も全く労働組合を知らない。加入して労組費払ったら即座に解決と言った感覚で来る人も少なくない。

⇒団結の意味をなかなかすぐには理解できない。

⇒これもつながりの機会を増やし様々な労働者と交流する中で克服していくしかない

⇒様々な取り組みを強化していきたいとは考えているが

⇒ポイントとなる「人」を見つけるのが大切

⇒ポイントとなる「人」を増やす⇒当たり前だけど

⇒その時に単産、単組の枠にとらわれない発想も大切

⇒お互いの活動に参加⇒職場レベルで一歩ずつでも近づき合う発想が必要